MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２４．７．１７　発行元
第 590 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

下村敦史「そして誰かがいなくなる」

２月に中央公論新社から下村敦史の『そして誰かがいなくなる』が出た。私が下村作品を読むのはこれが初めて。いかにも「本格ミステリ」らしい題名に魅かれて手に取ったが、中身の方も十分に楽しめる出来だった。

下村敦史という作家

今まで下村敦史の作品を手に取ったことがなかった。調べてみると２０１４年の『闇に香る嘘』が江戸川乱歩賞受賞作品で、この年の『このミステリーがすごい！』年間ランキングの３位にランクされていた。なかなかの実力の持ち主らしく、レベルの高い作品を連続的に出していることがわかった。

これまで気付かなかったのが失敗だった。これを契機に他の作品も読んでみよう気になった。

本そのものが凝っている

この本はまずカバー（ジャケット）を外して表紙を見る必要がある。どうやら写真のようだが館内部のようすが示されている。本書に登場するそのもので、この写真にも手掛かりが隠されているのかと思ってしまう。表紙を開けての内側もその次のページも館の写真が続く。

ということで本の造りそのものがかなり意図的に作られている。内扉に続く黒地に白抜き字のプロローグも凝った造りになってる。

巻末の「謝辞」を見ると、作者自身が計画した建物のようで、本書にぴったり合わせたものになっているらしい。本文中にも館内部の写真が何箇所か提示されている。

作家の館に集まってきた人達

ミステリ界の大御所のような作家・御津島磨朱李の新居が完成したということで、お披露目の会が計画された。招待されたのは同業の作家が何人かと、出版社の担当編集者、文芸評論家、そして、名探偵・天童寺琉。その日は大雪になり、やがて交通手段は止まってしまう。

館は出口や窓を開けると警報音がなるという密室状態。食事が終わった後、館主の御津島の姿が…。

そして次なる事件が…

はっきりとした事件の形が出てくるのは百ページを過ぎてから。語り手の視点が次々変わるのが読んでいて気にかかる。物語の雰囲気、謎の作り方、張り巡らされた伏線、そして登場人物たちが積み重ねる推理がよく出来ている。

感情をできるだけ排除した出来事中心の描き方がとてもよい。「本格ものミステリ」はこうでなくてはならないという王道が示せたのではないだろうか。

〈下村敦史・作品リスト〉

１．闇に香る嘘	2014 年
２．叛徒	2015 年
３．生還者	
４．真実の檻	2016 年
５．難民調査官	
６．失踪者	
７．告白の余白	
８．サイレント・マイノリティ	
９．緑の窓口	2017 年
１０．サハラの薔薇	
１１．黙過	2018 年
１２．悲願花	
１３．刑事の慟哭	2019 年
１４．絶声	
１５．コープス・ハント	2020 年
１６．法の雨	
１７．同姓同名	
１８．ヴィクトリアン・ホテル	
１９．白衣	2021 年
２０．アルテミスの涙	
２１．情熱の砂を踏む女	2022 年
２２．ロスト・スピーシーズ	
２３．逆転正義	2023 年
２４．そして誰かがいなくなる	

柊サナカ『３分で読める！ミステリー殺人事件』

６月に宝島社文庫から出た本。少し前に同じく宝島社文庫から出た『一駅一話！山手線全３０駅のショートミステリー』（第５４７号）を紹介したばかりなのに、同じような趣向のショートショート集が発刊された。作者の柊サナカは想像していたよりも多才な書き手なのかもしれない。私は「ショートショート」という形式が好きだ。一話ずつの切れ味が読みどころであり、一話読み終わるとすぐ次の話を読みたい気持ちにさせられるので、あっという間に読了してしまう。今回は各種「ミステリー」を題材にしている分、『山手線３０駅』より面白味が増したような気がする。パロディの枠を越えた「きつめ」の結末がついている作品もある。全部で２４話収録。

「童謡殺人」「倒叙ミステリー」「ダイイング・メッセージ」…とテーマが提示してあるので、作者の意図が伝わりやすい。その意味ではある程度ミステリを読み慣れた読者の方が面白味が深まるような気がする。「密室」に当てられている『あわてんぼうさんの密室』は、犯人に密室を作ろうとする意識はあるのだが、そこに至るまでの過程で…。「鉄道」の項目の『時刻表ミステリーの精霊』は時代に合わせた内容として工夫されており、「なるほどそうだなぁ」と思ってしまう。このような流れで行くと同じテーマを使って別の作品集もすぐに書いてくれそうな気になる。柊サナカは思っていた以上にミステリ・マニアであることがわかる。